



刀筆青砥石文八

^ 13
3573
8



門 13
號 3573
卷 8



還てこれと吉吏とて聊も怪る詩歌のうろを解ゆ博士を考て判断を
謹慎の美を味けし心を師とて當否を考て能詩歌の示現を考て
初は山鷄の片靴と濁水の弁と考て交易志するは色を濁れて命を喪ふ
戒とるは足は彼嶋影屋湯治は徒亦是名詮自性中と嶋を分て山鳥を
水石の水は影とるは濁れて命を預せしは性もれ人の為は詳評を寔に
光益の辨を考ては亦無明の醉醒はみろ罪を考て刑を就し不便を考て
と示現の佛の示現は量中と知覚を考ては亦一國家の法度はその文
言俗を通せざるは寸寧及後記憶して恐謹と後護は豈罪人と考ては
わんや君子の境に入て國の大禁を問ふとこのあるは奸詐を懲て恐中

つらや

早稲田 大學 圖書館
昭和 34.6.3 受
藏 書

國家の法度と志失とと儼倅と樂ひん抑亦愚かぢやんハ鐵倉なる鐵
 觀世音ハ佛像不具中七首の全一ハ大慈大悲の方便一切衆生造惡の因果と
 天罰と始免れど五刑との身當と死首と軀と所と異ゆをそのまゝかゝの如くすと
 示るる爲に斬首の像と末世に遺に首觀音のその堂内は薨り一夜の女子と理の
 引入れと或強の汚穢とせしむ惡行今年と累ね改過懺悔の念かゝれは
 首ハ軀と去りてかぐのどくわんと夢中の示現あわんぞんその水とありて
 失せしむかゝるもあひぬげれどもとも做歳の護あへし又劇齋へ去歳の冬
 清水の舞臺とて扇とち落し磔が笄と折しより件の女子とあひ
 娶りしめんと裏に異社があらうなり是も亦觀音の靈地に入て恭

信の何処のものとも識ざりし端婦は懸相せしあや穢れり。是之神仏
 詣りし花の春紅葉の秋或ハ縁日の開場と宗とて深信のありかたハ百遍
 十遍多るとも豈神佛の眞加わんや。まをせしが慾は迷ふ是ハ云々の示
 現めん彼ハ云々の前象めん。とらうハ勝もあひり。ハ寔ハ九夫ハ様
 智恵ハ天賞罰ハ國家の樞機汝ハゆのその罪あり偽二郎藥中劇齋
 蜜ハ亦ハ主の留守ハ奸夫端婦の執持をその罪是て極
 共ハ首と別べたりの異社ハ磔が不義とあり。その保人の故とて劇齋ハ
 忍の形と許せ怒と共ハ匙と隠し月を歴る。これ亦免れ
 ぶりのよりて京都と追放を大約それらの赴ハ六波羅殿の沙汰と

此の與り所件あつた事の如ごとく皆みなこの旨こゝろと兼あれと嚴たく採とりて罪人つみびとの噫うとせり。小齋せうさい一慚い愧は後悔ごうかいしく顔かほつらるら伋あ立たむゆゆとされハ淺羽あさは五十子いそこハ當座あうざの士卒しそハ藤岡ふじおかの才幹さいかん智辨ちべんと賞嘆しょうたんしく共ともに呼よぶと感あんじける。

第十套下 淑人の吉祥

當下あつたとき熊野くまの且藏かつざうハ進すすむと藤岡ふじおかハ稟りやうはる却憲せつげん断たつ灼然しゃくぜんハ父ちちハ冤枉えんかう忍地にんぢハ氷解ひやうかいしく赦免しやくめんと被かりりしハあよおれ歡よろこびは也なりと劇齋げくさいハこの年来このとと小人せうじんハ師しあり主しゅハ彼人かの人犯とせり咎とがあり誅せうせられハあつた罪つみハハハ誤信ごしんて且藏かつざうハ命いのちと也なり。その師しの悪あくと頭あたましく母ははのが徳徳とくとくと脱だれりハ風かぜハせり。れハ巧たくましく也なり。且かつ小人せうじんハ官府くわんぷハ對たいしりてさる罪つみハハハ主しゅの金かねと

盗ぬすとてこれと贖あがかちりてこれハ劇齋げくさいハ對たいしりて罪つみハハハ和漢わかんの先蹤せんそうと尋たづねハその子こらハその臣おみハハハ或あるハ親おやの罪つみハハハ或あるハ君きみの死しハハハ今いまも忠臣ちゆうしん孝子かうしと也なり。おれ小人せうじんと罪つみハハハ劇齋げくさいハ死しと宥なむハハハ此この人の兄あに慈悲じひハハハと人ひとハハハ願ねがひハ藤岡ふじおかハ頭あたまとち掉おり也なり。所願しよくわん神かみハハハ奸惡けんあくハハハと赦しやくと良善りやうぜんハハハと赦しやくハハハ國家こくがハ政道せいだう立たた秋あき被か周しうの時とき曾そうの直躬ちゆうこうハハハ父ちちの悪あくと許ゆるすハハハ父ちちの罪つみハハハ代しろりて願ねがひハ解とくハハハ只ただ名なと取とりて欲ほせ也なり。智ちハハハ解とくハハハ如ごとく大九たいくこの件けんの枉津かうしん日ひハ鳴な影かげ屋や湯治たうぢハ起おちり弟あに劇齋げくさいハ盡じんと積惡せきあくの家餘殃けあゆあやハハハ彼か湯治たうぢハ徒たハ也なり。名詮なせん自性じしやうハハハ又また也なり。今いまも也なりハ劇齋げくさいハハハ奸惡けんあくハハハ亦また名詮なせん自性じしやうハハハ也なり。

熊野の死病のうらみありとて○これ名詮自性之渠幸ひやと奸媼の家やも
 仕へば○あつて豈罪人とわらんと一期を無異と過失死は不覺は悪むらひひ
 人をも活し人をも殺す是の匙を所以あり又異社と守宮と和訓同し俗は
 守宮の霜の媚薬は奇效ありと異社婆とこれ似たり渠は長舌多辯と
 好色人の心を動し街妻側室の媒妁と結計とあるものありあつと
 劇齋は磔と薦り匙を使へ一旦その利をぬえん遂は禍を脱す
 媚薬と揮被て劇齋と惑せし異社の守宮とるもその名詮自性
 とるに只奸悪のめをかくたは熊野の人氏中と熊野且藏と俗稱を
 野の字と之の字と和訓同し且と俗の胆の字と相より熊之膽脈ハ

熊胆あり亦是名詮自性といふべし熊の膽は味の甚しく苦なりと蛇と
 征へて疳を破り鬱とひ死毒を解むその效枚舉るは違ひ素あり人參と
 伯仲し諸薬の巨擘なりと多能なりと毒死の且藏が氣質これに
 似たりと劇齋が意は協し諫言早し悖ひ秋良菜口は苦地之謂也
 惜しむれば且藏も亦人となり世は名医ハ少くぬむと年来奸曲あり
 劇齋は随従ある汝との姓廉直かれども奸邪の家は仕へる傳説を
 殃危を取りり譬は主の金と畧奪れて身を鴨河に投んとし又蓮華院
 かく寺内は送る小鏡ととりあがる皆是湯治が初悪心の類を引く
 山鶏の水鏡は因縁ありさざりその心は絶て邪死とて神明仏陀の

擁護よりく欣幸して脱れり水石の礫が井に落されたる是が鴨河の技
 入とられる皆山雞の影は寛惚く禍を執るは似たりとありと解示せ
 且藏あり感佩しくわたり尊教をかへしは似ては恐く受
 ども小人の幼少より孤独赤貧のれ中へ須波の資あるとありしとて師と
 擇ぶの餘力も死且小人が字が所へ衛生の技の儒学を受るのめり
 師の心ざりしとあれかゝるもは医術が技擧めり事足れりとありは既に
 中へ療治のうへも年来思做ひ人へ恩義中とまへり愚意は疎畧ハハ
 りど劇齋が意は協はるる憎れゆひの茂水の場合所致身を責む
 りり人へ恨と死たるの故よその罪は代らんと願ひて名聞の為とあり

御許容あが幸ひかんと再々頻々企望ハ藤綱まはく嘆賞して雲時
 傾け霜の後松栢の標を知るとは汝が志標ハ賞はべり。あれは願ひは
 りれは旨われ今試は汝を用ひんこの六波羅の獄舎の中は囚徒七八童病
 あり死にゆくを生もやぬものありとぞり汝彼ホと療治せよ功ありば必賞せん
 ありせよかと命づく且藏はこの日あり休足所を賜りて六波羅の館小
 苗り劇齋ホ五人の男女ハ舊のて獄舎に繋ぎおん下知と誅べりと獄吏
 旨と好むと更蓮華院の役僧を召近づけ劇齋が妾礫ハ原是枉死の
 のあり浮屠家の律よありとゆきもそが葬りハむ住持の越度あり
 ざり劇齋が奸計發覺れは格別の誡をありとありは答を返り

藤綱の聽より罷りて長時朝臣は對面しつ倅送しめ告ぐ長時朝臣は
 感悦しく款待の浅くはれやが劇齋為二郎と誅せしむるを以て
 不時の赦を被りて死罪一等と降されて遠地嶋峯に流されり。
 先づ鎌倉の將軍頼朝朝臣の故ありて職を罷られ三年後
 嵯峨院の皇子宗尊親王と征夷大將軍に拜仕し鎌倉へ下されり。
 前攝政藤原兼經公の兒女を執權北條時頼の養女として北の
 方まで備ふがて件の北の方この時懐妊おしく既五ヶ月及りありて
 安産おん禱の為京鎌倉に赦を祈りて輕罪人の放され重死死刑を宥らる。

劇齋の薩摩馬の鬼界嶋蜜八硫黄嶋為二郎の澳の小嶋茂中ハ
 水嶋へ配流はて是ハ佐渡へ流はると定られ異社におまて赦されて都子
 苗のけをがて件の配軍ハ浪速の浦へ追立てれ且順風をまほし且藏ハ
 重病の囚徒を療治するに絶よ七日許ゆて一人も送め瘡のぬ當下
 藤綱ハ長時朝臣に相譚くむしめて且藏を向注所へ召よせ療治その
 效を奏はるこの速かり賞禄とて沙金拾五兩と賜りたり且藏則
 この賜をりて食調度を購求めこれを劇齋に贈り遣り且身も嶋
 後いぬとて且暮の艱苦を扶えり只管願わぬ劇齋不良は
 りて汝を害せんとす既これ分明なる今も何の恩義おん汝ハ非如

青砥石文卷六

三十四

徳ぞもく然も報んと欲せども律の地り許さる所なれば隨從の願ひ
 かかると但その恩賜の金どり劇斎は衣食調度を贈遣えと願ひしを
 曩も密八は吞奪れり金と貰んと為るべければこの一條の許容せざるが
 隨意とて之を免許の状を賜りければ且藏は拜舞して国恩を謝し
 即日淀船より乗りて次の日浪速に赴けり彼件を購て之を劇斎が
 船より取りて打ち水主ホへ順風おれども出船の貝を吹立るその浦わし
 且藏は劇斎は對面と年来の恩を謝ししをとおを期しが此離別の涙と
 涙ぐみ劇斎は今も慚愧後悔と回答せしめ其路は又偽即
 藥中密八も且藏が忠心と見えしを就たばくつ此不良の心を轉て先非と

悔く多かる。かそわぶはゆれば竟は復を解せしむ。配所は
 劇斎が不義中富巷路の富方も金銭器材は其家と庫も毀れて官へ
 収められ守もる傭人ふいあが禁獄せられ日より捨て去られ只忙と
 守る程この日やをく増おれどあが宿所はかゝるもかりし程は且藏が忠
 信の事の趣を多く京浪速は風聞して嘆賞愛敬せざるは富の資
 財と贈り病者へ試よとの療治を乞ける難病劇疾立地は瘥らばとの
 とや。あもその医療日よも。われは京浪速は往來とれども。その
 その居宅とトれ寡慾めく施と好し餘われが必散く貪りものを賑
 けりかゝるその次の年北四月の比鎌倉の將軍宗尊親王の北は方久しく

清和石巻巻六

三十五

不例ふれいありしありし日ひみくみく重おもしむしむああんん臨りん月げつへへ近ちかつつ死しをを御ご安あん産さん心しんももととをを
 在ざい鎌かま倉くらのの医い官くわんへへまま京きやうよりより名な医いとと召めい下げししててあありりてて医い案あんとと献けんららせせ又また有ありり験けんのの
 高たか僧そうとと管くわん中ちゆうにに屈くつ請しやうししてて加か持ぢせせをを使しどもども絶ぜつくく験けんハハあありりををううかりりしし程ほどははあありり
 一いつ夕しゆうのの夢ゆめはは年ねん来らい信しんししててあありり清しやう水すい寺じのの觀くわん世せ音いん忽とつ然ぜんとと枕まくらにに立たてて死し身みのの病びやう著しやく甚しん危きしし
 ちちをを熊くま膽たんとと用もちひひ使し然しかららばば全ぜん快かいまますすとと示しささををあありり三さん夜やもも及およびびりり既すでにに
 件けんのの靈れい夢むとと外がい様やうはは披ひ露ろあありりたたれればば執しやく權けん時じ頼らい朝ちゆう臣しんのの沙さ汰たととししてて典てん藥やく
 尚しやう藥やくはは旨ぢとと傳でんへへままくく熊くま膽たん劑ざいのの丸わ茶ぢととままあありりとと命めいせせししてて医い官くわんホホ
 承じやうりりくく眉まゆとと顰ひそめめ北きたの方かたはは死し病びやう惱なうハハ素すよりより熊くま膽たんのの症しやうははあありりままたたあありりたたもも
 台たい命めいはは重おもししむむたたとと熊くま參さん丸わんととあありりままとと七しち日にちもも及およびびりりたたれれ將しやうのの效きやくををたたれれたたららなな

よりより医い官くわんホホははままたたれれがが熊くま膽たんハハ死し症しやうはは相あ応おうししてて今いまハハ早はや熊くまのの胆たんをを除じゆ去そとと
 乞こふふ程ほどはは北きたの方かたハハ初はつめめとと靈れい夢む亦また復ふくまますす及およびびりりたたれれををままあありりたたれれ時じ頼らい
 望ぼうししてて親しん族しやく評へい定てい衆しゆうとと召めい聚く合ごうととのの意い見けんとと向むかははしし皆みな惘わう然ぜんとと辨べんととややこのこの
 死し青せい砥てい藤とう綱かうハハ畿き内ないのの勘かん察さつ事じ果くわてて鎌かま倉くらにに還かへりりててのの末ま席せきにに侍しやうりりたた
 時じ頼らいととんんととんんとと其その許もとははあありりあありり考かうあありりとと向むかははしし藤とう綱かう
 額がくととつつ死しをを訊きひひたたれれるる愚ぐ意いとと述のたまへへるる彼か御ご靈れい夢むのの熊くま膽たんハハ菜さい物ぶつののままたたあありり
 熊くま野の且かつ藏ざうとと呼よぶぶ医い師し今いま京きやう撰せんのの間まににありり渠みちハハ性しやう忠ちゆう義ぎハハ厚こうシシ去こ歲さいのの
 冬ふゆ都と也や苗なう様やうハハあありり下げ官くわん則すなはちち大だい波は羅ら殿てんにに代しろりりあありりてて渠みちハハ寛くわん狂きやうとと
 釋しやくししりりととあありりててのの人ひとととあありりしし療りやう治ぢハハ經けい験けんあありりととあありり大だいくくををたたれれとと知しれれりりそそのの

姓名を推し恐る示現の熊胆の熊野且蔵が事ありん試み微下して
 その湯液をこめあせぬ必とありしを時頼の議に任じ六波羅に旨を傳て
 往返夜を日継りたる且蔵六波羅より快轎に乗せられしを鎌倉参
 事とあり時頼これを宮中召入れ診脈のち枕茶を調呈すと命せし且蔵
 少ひ子あり余を畏りて只顧み辞しせんと許さく心あはれが已と
 ぬぞ医業を述べ湯劑を調進する程は只一貼ゆ之北の方北病悩を
 ぬり三日の病床を起せぬ七日の病復あり且幸ゆ御胎は
 恙ありしと諸司へ之を医官へ交え無双の国と稱り況て將軍執権の
 見知り大々給じ且蔵は三百貫の莊園を賜り侍医に召加え北の方北

御安産を日夜當中は侍と命せられ休息所を宛行は藤綱も
 且蔵の賞と物あり賜りけり當下且蔵へ恩命を謝しなると希ひ
 あり其短才中々なる寵恩を被るは原是劇齋が傳授よれり
 あり吾師劇齋ハ罪あり配流せられ今鬼東鳴在り願ふハ恩賜の
 莊園を返さるん九此度の恩賞は劇齋ホと免せぬ望足りとい
 ありし中時頼嘆賞津くは時よ遇く功は誇らば已と虚とそ
 初を忘れざるこれ仁人の心賜る所の莊園ハその終受され北の方の安産の
 おん禱とくをこの救を祈らん其首とそらゆると諭し且蔵を退る
 その後六波羅に赦を傳へ薩摩河原流人劇齋ホと放還はと

書影石文卷ナ
 三十八



業因の致し所の中もほつとて醫六傳二郎が夢物語は鐵觀音の頭顱俗髪
 むくの軀も死に死に己が面は肖りてとるも忽地水とかりて流れて迹あり
 一とひい今更かあるはよの首の軀も死に死に彼が死刑と省の景象と
 びびりかて水もかりて遠く荒磯に流る北あり又迹ありありとて救り
 あひあつ帰洛せぬ水とて七海北あり云為二郎の事だ劇繪蜜八茶中
 小も同悪の報と脱れば且その水も終と取方山雞の瀬も名詮自性影も溺
 徳蔵とほく一まあづむを釋諭せ端三言下は曉りて鬱胸と披くもの
 うう又つくとあやう今生の悪報に現入カもと極ひて縁故と案はるうか
 師の非命を終りしもの兄湯治の餘殃と攀る浴當とやんの崇むべし。まごの後の

世のいふく三熱の苦難と脱るうわん。ま師の菩提の捷徑のその源流と
 鎮ふよおとあつと深念とこれあり月の十分は法師も布施と普門品と誦せ
 又と秋れ于蘭盆は浴當ボク墳墓の何某の院の住持と導師とと浴當親子交平
 夫婦湯治劇繪が為は大地餓鬼の好交と與れと秋毎も念ひ法廷三年も及ぶ
 一と夕端三が夢は一個の替女端然とく枕方は立對ひ死身が年来の功德ある
 吾情のななく佛果とぬり。これが死身が父母のまも有縁の人と漏るもあて皆天堂の
 登りお死がくも死が子孫の家門繁昌疑ひなくとて失る明とひ死此業
 ろも乘て西と投てむ飛去る端三覺く歡び堪は次の日米錢夥散くを見か
 取るる長旅は宴れる老弱二人の女僧施粥の場より来るととそれれは是別人

かゝるに復達し青砥河の賜と藤綱が家の病用ハ駕と疎むく遠
 ざるとあり又その謝物と受らんをこれなり在鎌倉の武士医官塔縁と求る
 めの妻より中二階堂入道の女児尤賢くとゆえ一づこれと娶りて三男
 二女と奉りその子ども成長の後長男は家業を嗣しく且三と名告りて
 身ハ致仕隠居しく水嶋居士と號しりこ山鳥の水は濁る歳の意ゆへ
 亦後水嶋居士端三ハひとり鎌倉を辞し去り且く都は杖と駐り蓮華院は
 劇齋ホガ墓石と立て祠料を寄せ紀の藤白は起たけいひり一れを物と贈し
 里人は厚く酬やく劇齋が送田と何ぞ別荘園と購求め名草が菩提
 所との親族の子分與へく劇齋が名迹と文工と謀る程よ返首日と

累く死病を濟ひ貧窮を賑ひ終は舊里熊野に還りて父祖親族の墓と
 祀り多く里の貧人は施し二錢も遣し貯む熊野山は閑居しく二百餘歳をたわ
 一とどの子後の且三も鎌倉の將軍は仕ありて医術をとり親方ハ二男三
 男ハ武藝を好む新は召せられ武士ありつもの子孫をまそつけれも
 繁昌昌せりハ一夫医ハ仁術中へ人の司命なりこの端三法橋のありを念を
 才の投り誇り勢利熱中あり奔走共かる慶福ありやとけり
 附く編中の画は今や衣裳調度あり煙管社杯亦是文亦亦は准む四條
 河原の段その他あり或ハ画工の筆は伴或ハ原稿の意は後者首官皆あり

刃筆青砥石文書水蔵語卷之六終

曲亭馬琴著編

歌川國直繪畫

文政三稔歲次庚辰

仲春吉祥令辰發兌

曲亭翁新編教種刊行海内發市焉

本所松坂号

平林庄五郎藏梓

生花四季友 三冊

生花の遊錫とて初めは生花の傳會屋の
ん坊おすて初めは生花の種とて多く
生花の本は生花の傳會屋の
生花の口傳を定めて書く國々著し
述

生花出生傳 四冊

此書ハ小條三條傳有る生花の合刻して
生花の遊錫とて初めは生花の種とて
多く

生花奥儀抄 四冊

此書ハ小條三條傳有る生花の合刻して
生花の遊錫とて初めは生花の種とて
多く

四季百瓶圖 三冊 燕子百瓶圖 二本

松月堂百瓶圖 三冊 遠州流正風花矩 四冊

文政六年癸未秋

心齋橋通博勞町角

大阪書林 伊丹屋善兵衛

